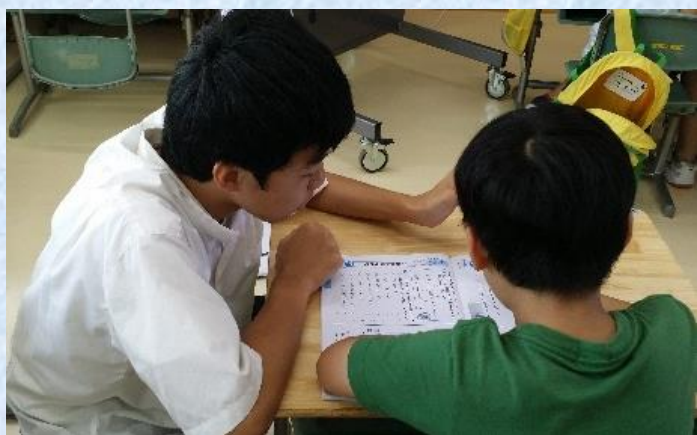

中学校と高等学校の連携事例集

【令和元年度（2019年度）】



令和2年（2020年）3月

北海道教育庁学校教育局高校教育課

作成の趣旨

生徒の発達段階に応じた系統的な教育活動の充実を図るためには、学校段階間の接続を意識した教育課程の編成・実施や指導方法の工夫・改善を行うことが重要です。

北海道教育委員会では、中学校と高等学校の円滑な接続の観点から、中等教育の多様化を一層推進し、生徒の個性をより重視した教育を実現するため、平成 14 年度から連携型中高一貫教育校を導入するとともに、平成 19 年度には一体型の中等教育学校を設置しています。また、中高一貫教育制度を導入していない高等学校においても、地域の実情に応じて、中学校との連携のほか、小中高の一貫性に配慮したキャリア教育の実施など、学校種間の連携を積極的に展開しています。

この度、学校段階間の連携・接続のさらなる推進を図るため、中高一貫教育校の取組や、中学校等の他校種と高等学校が連携した取組を事例集として取りまとめました。

各学校において、本事例集が積極的に活用され、地域の特色を生かした教育活動が一層充実することを期待しています。

事例一覧

本事例集には、中高一貫教育校の取組と、中学校等の他校種と高等学校が連携した取組を掲載しています。学習指導や生徒指導、進路指導、特別活動での具体的な連携の取組を取り上げています。各学校の事例で掲載している内容については、次に示す一覧のとおりです。

【事例の掲載一覧表】

	形態	学校名	具体的な取組として今回掲載している活動				頁
			学習指導	生徒指導	進路指導	特別活動	
中高一貫教育校	一体型	北海道登別明日中等教育学校	○				3～4
	連携型	北海道鷗川高等学校	○	○	○		5～6
		北海道えりも高等学校		○	○	○	7～8
		北海道奥尻高等学校	○	○	○		9～10
		北海道上川高等学校	○	○	○		11～12
		北海道湧別高等学校	○		○		13～14
		北海道鹿追高等学校	○	○	○		15～16
		北海道広尾高等学校	○		○		17～18
		北海道羅臼高等学校	○		○	○	19～20
高等学校等の他校種と 中学校等の連携	北海道月形高等学校				○	21	
	北海道札幌英藍高等学校				○	22	
	北海道蘭越高等学校	○				23	
	北海道知内高等学校	○			○	24	
	北海道天塩高等学校	○				25	
	北海道枝幸高等学校	○				26	
	北海道佐呂間高等学校	○	○	○		27	
	北海道雄武高等学校	○			○	28	
	北海道興部高等学校	○				29	
	北海道霧多布高等学校				○	30	



(参考) 中高一貫教育の特色

中高一貫教育は、これまでの中学校・高等学校に加え、生徒や保護者が6年間の一貫した教育活動を選択できるようにすることにより、中等教育の一層の多様化を推進するものです。生徒一人一人の個性を重視した教育の実現を目指しており、北海道には、「中等教育学校（一体型）」と「連携型」の2つの形態があります。

●個性の伸長と豊かな人間性の育成

中高一貫教育は、6年間の計画的・継続的な教育活動を行うことで、生徒の個性を伸ばすことや、早期に優れた才能を発見することが、従来よりも一層可能となります。

また、高校入試の影響を受けずに、ゆとりある安定した学校生活を送ることができるほか、異年齢の集団による活動を通して社会性の豊かな人間性を育むことができます。

中等教育学校（一体型）	連携型
<ul style="list-style-type: none"> ・1つの学校 ・6年間の一体的な教育 ・他の中学校卒業者の受検不可 	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校と高校が連携 ・他の高校受検も可能 ・他の中学校卒業者も受検可能
	

形態	導入設置年度	学校名 ※（ ）内は連携型中学校を示す
中等教育学校（一体型）	平成19年度(2007年度) 平成27年度(2015年度)	北海道登別明日中等教育学校 市立札幌開成中等教育学校
連携型	平成14年度(2002年度) 平成15年度(2003年度) 平成15年度(2003年度) 平成16年度(2004年度) 平成17年度(2005年度) 平成18年度(2006年度) 平成19年度(2007年度) 平成29年度(2017年度)	北海道上川高等学校（上川町立上川中学校） 北海道鶴川高等学校（むかわ町立鶴川中学校） 北海道鹿追高等学校（鹿追町立鹿追中学校、鹿追町立瓜幕中学校） 北海道えりも高等学校（えりも町立えりも中学校） 北海道湧別高等学校（湧別町立上湧別中学校、湧別町立湧別中学校）※ 北海道広尾高等学校（広尾町立広尾中学校） 北海道羅臼高等学校（羅臼町立知床未来中学校） 北海道奥尻高等学校（奥尻町立奥尻中学校）

※湧別町立芭露学園は、義務教育学校のため、連携型中高一貫教育校として扱うことができませんが、上湧別中学校及び湧別中学校とともに、湧別高等学校と連携した教育活動を実施しています。

(参考) 関連資料

北海道教育推進計画 2018年度～2022年度（北海道教育委員会、平成30年3月）

施策項目 21 学校段階間の連携・接続の推進

■現状と課題

- ・中学校教育と高等学校教育の接続については、義務教育段階で身に付けておくべき資質・能力をしっかりと育成した上で、高等学校の学びにつなげるとともに、高等学校においては、必要に応じて、義務教育段階での学習内容の確実な定着を図るなど、高等学校段階の学びの共通性の確保を確かなものにしていくことが求められています。

■施策の方向性

児童生徒の発達段階に応じた系統的な教育活動の充実を図るため、学校段階間の接続を意識した教育課程の編成・実施や指導方法の工夫・改善を図るとともに、各学校間の連携を促進します。

指標	基準年度	目標年度(R4)
近隣の中学校と互いの教育活動について共通理解を図る場を設けている 高等学校の割合	(H29) 89.2%	100%

■施策の展開

○中学校と高等学校との連携

- ・高等学校において、必要に応じて学び直しの視点を踏まえた教育課程を編成するなど、中高一貫教育の実践で得た成果と課題を踏まえ、子どもたちの現状や地域の実情に応じて、中学校と高等学校の連携の充実に向けた取組を促進します。

これからの高校づくりに関する指針（北海道教育委員会、平成30年3月）

第2章 社会の変化や時代の要請に応える高校づくり

3 地域とつながる高校づくり(2) 地域と密接に結び付いた取組の推進

ア 他校種等との連携

市町村や地域の関係団体等のほか、小学校や中学校などの他校種との連携による、地域の特性や教育資源を生かしたキャリア教育などの取組や、道立学校間で相互に教員を派遣して授業等を行い、教育課程の充実を図る道立学校間連携の取組など、他校種等と連携した取組を推進します。

1 中等教育学校の特色を生かした教育活動の概要と成果（■：取組、◇概要、○：成果）

(1) 学習指導

■ 6年間を3期（基礎期・充実期・発展期）に分けた弾力的な教育課程の編成及び研究指定事業を活用した探究活動の充実

- ◇生徒の発達段階に応じた各期の目標を踏まえ、6年間を見通した学習シラバスによる指導の工夫・改善と習熟度別授業や少人数指導など、個に応じたきめの細かい指導の充実
- ◇「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」を通じた、地域に貢献する人材の育成
- 学習内容の定着と主体的な学習態度の確立が図られた。
- 探究活動に対する関心・意欲の向上が図られた。

(2) 生徒指導

■ 自己指導能力を育成する生徒指導の計画的な推進

- ◇全ての生徒の状況を教職員が情報共有する「生徒指導交流会」の定期的な実施と共通理解に基づく統一的な指導
- ◇全回生における挨拶運動や清掃奉仕活動の実施
- 他者を思いやる心や愛校心の高揚が図られた。

(3) 進路指導

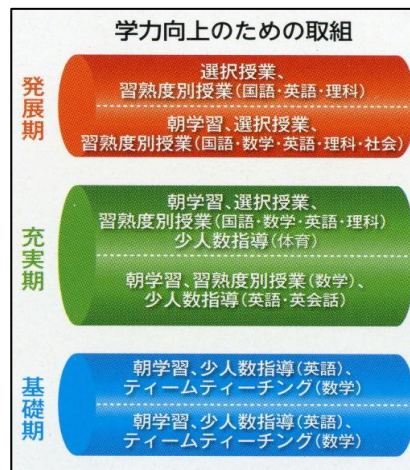
■ 6年間を見通した計画的・系統的なキャリア教育の推進

- ◇1回生での「地域ウォッチング」、4回生での「インターンシップ」など、発達の段階を踏まえた取組の実施
- 自己や他者、地域に対する理解の深化と進路意識の向上が図られた。

(4) 特別活動

■ 異年次による交流など多様な体験活動の促進

- ◇宿泊研修（1回生）における4回生との交流活動や校歌練習、前・後期生合同による部活動や異年次による文化祭での活動・発表などの実施
- リーダーシップの育成やコミュニケーション能力の向上が図られた。



2-1 中等教育学校の特色を生かした具体的な取組①「学習指導」

6年間を見通した計画的・系統的な学習指導の実践

登別明日中等教育学校では、6年間を2年ずつ3期（基礎期・充実期・発展期）に分けることで、生徒の発達の段階に応じた授業時数を設定するだけでなく、授業形態を工夫することにより、確かな学力の育成を図るとともに、きめ細かな学習指導を行っている。

(1) 取組の概要

- ア 6年間を見通した学習シラバスの作成と活用
- イ 教育課程の基準の特例を活用し、前期課程で後期課程の内容の一部を先取りした学習
- ウ 他の中学校・高校より2～3単位時間多い授業時数の設定と土曜授業等による授業時数の確保、授業内容の充実
- エ 習熟度別学習、少人数指導、ティーム・ティーチング、ICTの活用、朝学習や朝読書の実施
- オ 進学講習、オンデマンドセミナー、個別の添削指導の実施
- カ 生徒による授業評価を活用した授業改善



【CALL 教室での英語の授業の様子】

(2) 取組の成果等

- ア 前期課程と後期課程の間に入試がなく、6年間という期間で余裕をもった学習活動を展開することができた。
- イ 高校の授業内容を先取りすることで、早い段階で将来の進路を意識させることができた。
- ウ 基礎的・基本的な学習内容が確実に身に付くとともに、主体的に学習に取り組む態度が育成された。
- エ 習熟度別学習やティーム・ティーチングで授業を展開することにより、きめ細かな学習指導の充実が図られた。
- オ 朝学習や朝読書などの取組の充実により、学びに向かう力が育成された。

2-2 中等教育学校の特色を生かした具体的な取組②「学習指導」

文部科学省指定「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」における取組による探究活動の充実

本校では、開校以来、国際理解教育や外国語教育を重視した教育活動を展開するとともに、3回生から5回生が主体となり、平成26年度に指定を受けたスーパーグローバルハイスクール（SGH）の取組を通して、将来、地域や日本、そして国際社会で活躍する人材の育成を目指してきた。

2019年度からは、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」の指定を受け、主体的に考え行動する力を身に付けた、地域に貢献する人材の育成を目指した教育活動に取り組んでいる。

(1) 取組の概要

ア 前期課程では地域の特徴・課題や持続可能な世界を実現するための17の開発目標であるSDGs (Sustainable Development Goals)について学習し、胆振地域への理解を深めるとともに、グローバルリーダーとしての視点を育成する。

イ 4回生ではSDGsの視点と関連させて、地域課題探究を進める。登別市とその近隣をフィールドとして登別市や胆振総合振興局などコンソーシアムの関係機関と連携して地域を活性化させるための解決法の提案と実践を行う。

ウ 5回生ではキャリア課題探究を行う。5つのユニット（防災、医療、産業、循環型社会、福祉）を設定し、自分の興味や関心、進路を見据えながら課題を設定し、探究活動を行う。

エ グローバルな視点を持たせる取組として、海外フィールドワークを実施する。地域の課題は世界の課題につながるという考え方をもとにオーストラリアやタイでフィールドワークを行い、ローカルな課題とグローバルな課題に対する探究活動を深化させる。

オ 4・5回生の探究活動で得られた成果は「成果発表会」等で報告を行う。これには、地域の方やコンソーシアムを構成している関係機関の方にも御覧いただき、評価をいただく。3回生は4回生の発表を見ることで、自分たちの探究活動の準備を行う。



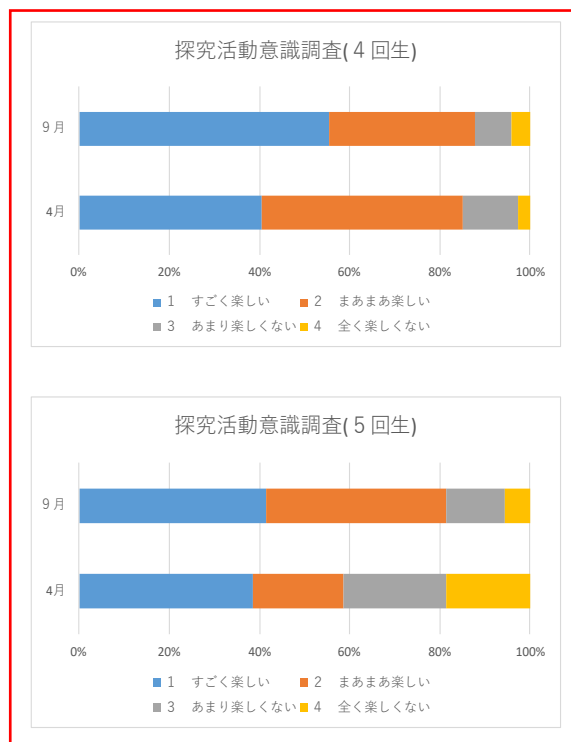
【5回生成果発表会の様子】

(2) 取組の成果等

ア 本研究指定事業は2019年度から始まったことから、取組による1年間の生徒の変容については、現在のところ測定できていないが、「探究活動に対するモチベーションについて」という質問に対し、4回生の4月時点の調査では85.1%が、9月時点では87.8%の生徒が肯定的な回答をしており、探究活動に対して高い関心・意欲があることを示している。

イ 5回生の同様のアンケート調査では、4月の調査時点では58.6%が、9月時点では81.4%の生徒が肯定的な回答をしており、探究活動を肯定的に捉える生徒が約1.4倍に増えている。探究活動の開始当初は、探究活動に対して不安があったが、活動が進むにつれて探究活動への関心・意欲が高まったと考えられる。

ウ 北海道高等学校学習状況等調査における「高校入学前に比べ、諸外国の人々との交流、異文化や生活習慣を知ろうとする意欲が高まったか」の項目では、肯定的な回答の割合が85.7%と、全道平均の50.3%と比較し、グローバル化に対する興味・関心や意識が大きく上回っている。



1 中高一貫教育の特色を生かした教育活動の概要と成果 (■：取組、◇概要、○：成果)

(1) 学習指導

■「チャレンジスタディ」や「むかわ学」を柱とした基礎学力向上及び探究活動の充実

- ◇「中高連携学習会」(中3)における基礎学力向上の取組(グループ学習・個別学習)
- ◇「中高連携学習会」(中1、中2)における探究活動の体験及び連携型入学者選抜における「中高一貫教育における学習の発表」(以下「プレゼンテーション」という。)の実施
- 高校進学前から高校での学習内容の導入部分を学ぶことで、スムーズに高校生活をスタートすることができた。
- 探究活動の基本に触れたり、プレゼンテーションを行ったりすることで、進学後の「むかわ学」での学びや外部への発表の際に力を発揮することができた。

(2) 生徒指導

■ボランティア活動を柱とした心の教育の推進

- ◇「中高ボランティア活動」において、主体的に奉仕する心を育成する取組
- ◇「国際ボランティア活動」において、留学生との交流を通じて、海外の生活及び文化等についての視野を広げながら、奉仕する心を育成する取組
- ボランティア活動の意義への理解が深まり、豊かな心をもつ生徒の育成が図られた。

(3) 進路指導

■キャリア活動を柱とした勤労観・職業観の醸成

- ◇「中高合同講演会」において、人間としての在り方生き方について考える講話の実施
- ◇インターンシップにおいて、望ましい勤労観・職業観を育成する取組
- 日常生活では得られない経験を通して、将来の自己実現に向けた意欲の向上が図られた。

(4) 特別活動

■部活動を柱とした、地域の活性化に向けた取組

- ◇吹奏楽部において、地域での中高合同演奏会やイベントの実施
- 地域の活性化について、中高の生徒が共に考える機会とすることができた。

2-1 中高一貫教育の特色を生かした具体的な取組①「生徒指導」

中高ボランティア活動

鷓川高等学校では、中学校と高校が協働する「中高ボランティア活動」を行っている。主体的に奉仕する心の育成と同時に、むかわ町の活性化のための活動として実施している。

(1) 取組の概要

- ア 中学校1年生と高校3年生の協働による、鷓川駅前広場へのプランターの設置
- イ 中学校2年生と高校2年生の協働による、日高道鷓川インターチェンジ入口付近へのプランターの設置
- ウ 中学校3年生と高校1年生の協働による、鷓川中学校の花壇の整備と鷓川高校玄関前のプランターの設置



【中高ボランティア活動の様子】

(2) 取組の成果等

- ア 異年齢交流の中で、「協働」、「教え合い」等のコミュニケーションを取ることで、自主自立の精神の涵養や、自己肯定感の向上が図られた。
- イ 鷓川駅前広場、高速道路インター出入口付近にプランターを設置する等の環境美化に中高生が参加することに対して、町民から感謝の気持ちが寄せられた。
- ウ 今後は北海道胆振東部地震からの復興のシンボルとして植樹を行うなど、むかわ町のために長く貢献できる取組を実施する。
- エ 令和元年度学校評価アンケート(生徒用)で「あなたは『中高一貫教育』の取組を通じて成長することができましたか。」という質問に対し、約7割の生徒が、「そう思う」、「少しそう思う」と回答した。

2-2 中高一貫教育の特色を生かした具体的な取組②「学習指導」

中高連携学習会

本校では、「中高連携学習会」を実施し、鷗川中学校の生徒の基礎学力の定着や知識・技能を活用する力の育成、探究活動、高校内容の先取り学習を行っている。

(1) 取組の概要

- ア 中学校の学年や学習の内容に応じて、Ⅰ～Ⅴ期の講座を年間30時間程度を設定し、様々な内容について学習できるようにしている。
- イ 中学生の進路希望により、スタンダード（基本）とプログレス（応用）に分け、中学生の学力向上の一助となるよう構成している。
- ウ 中高の教員が協力して講師を務め、中高の学習が円滑に接続するようにしている。



期	学年	スタンダード（基本）	プログレス（応用）
Ⅰ	中3	基礎学力の育成	高校入試を想定した学力の育成
Ⅱ	中1・中2	探究活動	
Ⅲ	中3	プレゼンテーション能力の育成	高校入試を想定した学力の育成
Ⅳ	中3	高校の学習内容の先取り	高校入試を想定した学力の育成
Ⅴ	中3	高校の学習内容の先取り	

(2) 取組の成果等

- ア 中学生が高校の学習内容を先取りすることが可能になり、中高間の学習の接続がスムーズに行われている。
- イ 鷗川中学校の生徒の学力向上を目指し、校種の枠を越えた指導を充実させている。将来的には、むかわ地区の児童・生徒全員が学ぶことができる「場」へと発展させていきたい。

2-3 中高一貫教育の特色を生かした具体的な取組③「進路指導」

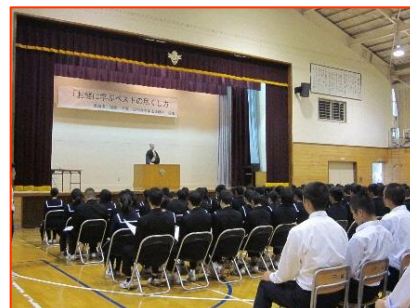
中高合同講演会

本校では、むかわ町教育委員会に御協力いただき、「中高合同講演会」を実施している。著名人による講演や芸術鑑賞等、生徒の心の教育と進路実現に向けた意欲の向上を目指して実施している。

(1) 取組の概要

令和元年	法相宗大本山奈良薬師寺録事 加藤大覺 氏	お経に学ぶベストの尽くし方
平成30年	BLACK BOTTOM BRASS BAND	デキシーランドジャズ鑑賞
平成29年	北海道大学総合博物館教授 小林快次 氏	恐竜研究最前線

- ア 講演会と芸術鑑賞を隔年で実施している。生徒が「本物」に触れることで感動し、自己実現のために自主的に活動しようとする心の醸成を期待している。
- イ 平成29年度は、「むかわ竜」の研究の最先端についての講演会を実施した。
- ウ 平成30年度は、芸術鑑賞としてジャズバンドの生演奏を鑑賞した。
- エ 令和元年度は、お経から生き方を学ぶ講演会を実施した。



【中高合同講演会の様子】

(2) 取組の成果等

- ア 地方の生活ではなかなか触れる機会の少ない貴重な講演や芸術を体験することで、将来の自己実現に向けた意欲の向上が図られた。
- イ 様々な講演等を通して、身近で起きている世界的な出来事について理解することができた。
- ウ 町民にも広く参加を呼びかけることで、本校の教育活動を地域の方に知ってもらえることができた。

1 中高一貫教育の特色を生かした教育活動の概要と成果 (■：取組、◇：概要、○：成果)

(1) 学習指導

■高校の教員による乗り入れ授業及び合同授業、中学校イングリッシュトライアル支援

- ◇高校の教員による乗り入れ授業（数学・英語のほか、他教科においても不定期で実施）を行っている。また、本校の英語科教諭が中学校の英語指導への支援を行っている。
- T Tにより幅広い学力層の生徒に対する支援が充実している。イングリッシュトライアル支援は、中学生の4技能向上に寄与できる。また、中学校時より生徒の学力や学習実態を把握できるため、高校における指導への円滑な移行に役立っている。
- 保健体育の合同授業では、受講する生徒が増えるため、種目の幅が広がり、活動が充実する。

(2) 生徒指導

■中高合同でのいじめ防止啓発活動

- ◇高校の学校祭での「いじめ防止宣言」策定に向けた取組や、中学校での「いじめ撲滅集会」に、生徒会の生徒が相互に参加している。
- 中学校から高校まで継続して、いじめ防止に向けた意識の醸成を進めることができる。

(3) 進路指導

■中高合同職業別ガイダンス

- ◇高校生・中学3年生を対象に、高校において大学・短大・専門学校の出前講義を実施している。自分が希望する講座を2つまで受講できる。
- 早くから様々な専門的内容に触れることで、自らの進路について考えることができる。近隣に上級学校がない中で、様々な学問や職業に触れることができるよい機会となっている。

(4) 特別活動

■中高合同部活動

- ◇人数不足や教員の専門性を生かすため中高合同で部活動の練習を行っている。
- 高校では吹奏楽部はないが、中学校の教員の指導のもと、吹奏楽団体コンクールに「えりも中学校・えりも高校合同バンド」として出場できた（平成30年度・令和元年度）。

2-1 中高一貫教育の特色を生かした具体的な取組①「生徒指導・特別活動」

中学校と高等学校が連携したいじめの防止に向けた取組

えりも高等学校とえりも中学校では、生徒会の相互交流を通じて、いじめの未然防止の取組を一丸となって推進している。本校からは、中学校の「いじめ撲滅集会」に生徒会執行部が出席し、中学校からは、本校の学校祭での「いじめ防止宣言」の採択の際に、中学校の生徒会役員を招いている。

(1) 取組の概要

- ア 中学校の「いじめ撲滅集会」に、本校の生徒会執行部が参加して、中高が一体となっていじめ撲滅に取り組んでいることを確認した。えりも高校の卒業生から中学生全員に寄贈されたTシャツを高校生も一緒に着用して集会に臨み、気持ちを新たにいじめの未然防止に取り組むことを決意し合った。
- イ 本校の学校祭には、中学校から生徒会役員が参加し、中学校においても、高等学校と同様にいじめ撲滅に取り組む意識を高めていた。



【本校学校祭に参加する中学生】

(2) 取組の成果等

- ア いじめに対して、中学生と高校生が意見交流を行うことにより、いじめに対する中学生と高校生の認識の違いを実感し、立場が違ふと考え方や価値観が異なることを再確認した。
- イ 中学校と高校が、共通の課題をもって、いじめの問題に取り組むことができるようになり、いじめの防止に向けた意識がより一層高まることが期待できる。
- ウ 部活動や体育の合同授業など、中学生と高校生が交流する機会においても、互いの違いを認め合いながら、意思疎通を図りながら課題解決に粘り強く取り組むことが期待できる。

2-2 中高一貫教育の特色を生かした具体的な取組②「進路指導」

高校生による進路講話

本校では、中高連携事業の一環として、進路が決定した3年生が進路実現までに努力したこと、進路実現のために今からやっておくべきことなどを自身の経験をもとに中学生に講話する「高校生による進路講話」を行っている。

一昨年から中学生のほか、町内の小学校6年生も全員参加しており、中高一貫を基礎とした小中高連携の取組も推進している。

(1) 取組の概要

ア 進路決定した高校3年生（例年4名程度）が、中学校の体育館で自己の進路活動や取組を振り返りながら、体験をもとに中学生や小学生にアドバイスをを行う。

イ えりも中学校全生徒、町内5小学校6年生全児童が中学校に一堂に会し、高校生の講話を聞いている。

えりも高校を志望する中学生に対しては、連携入試の際に面接において発表する「中高一貫教育のまとめ」の題材の一つにしている。



【令和元年度進路講話の様子】

(2) 取組の成果等

ア 中学生や小学生にとっては、身近な高校生から、様々な進路を実現するために努力したことを直接聞くことにより、日常の学習や諸活動に取り組む姿勢を振り返り、意欲を高めるよい機会となっている。

また、普段から同じ環境で生活する上級生の姿を見ることで、高校生活をイメージでき、重要なキャリア形成の機会にもなっている。

イ 高校生にとっては、自身の学校生活で身に付けた資質能力を振り返り、新たな目標を設定する機会となる。

また、中学生や小学生に向けた適切な話し方や、言葉の選択などを考えながら、発表するため、言語活動の充実にもつながっている。

ウ 高校生から小中学生に話されることの多くは、日常生活における基本的な学習習慣や課外活動の継続、挨拶等のコミュニケーションの重要性を説くものが多いが、年齢の近い高校生からの生の声には説得力があり、小・中学生にとっても日常生活の改善に取り組みやすい。

2-3 中高一貫教育の特色を生かした具体的な取組③「特別活動」

えりも岬百人浜緑化事業

本校では、中学校と連携し、平成19年度から、「百人浜に学ぶ」をテーマとした環境教育を導入し、国有林への植樹（中学生）と間伐・枝払い（高校生）に取り組むことで、昭和28（1953）年から続くえりも岬緑化事業（「えりも砂漠」とも呼ばれたえりも岬への植樹による緑化と海洋資源の回復）に携わり、郷土理解を深めている。

(1) 取組の概要

ア 中学校1年時に黒松の苗木を植えるための「カミネッコ」を作製し、百人浜に植樹する（自分の名前を彫った金属製のプレートが苗木につける）。社会で「えりも緑化と歴史」、理科で「環境問題と森林の大切さ」をテーマに事前学習を行う。

イ 高校1年時に、百人浜の樹齢25年程度の森林の間伐・枝払い作業を行い、森林の保全を行う。その際、中学校時に植樹した場所を訪問して、自分が植えた木の成長を確かめる。生徒は想像以上に木々が成長していることを実感している。

ウ ア・イいずれの取組にも、環境省日高南部森林管理署えりも治山事業所・ひだか南森林組合・及び教育委員会や産業振興課の支援を受けて実施している。高校生には、日高振興局森林室の職員による担い手教育も行っている。



【植えた木の成長を確かめる様子】

(2) 取組の成果等

ア 身近な場所から環境問題について考え、実践することができている。

イ 地域環境や歴史を学び、郷土に対する理解や郷土愛を深めることができおり、歴史・理科の知識のみならず、道徳的資質を育成する取組にもつながっている。

ウ 地域の機関と連携して地域社会に直接働きかける「社会に開かれた教育課程」の重要な取組となっている。

1 中高一貫教育の特色を生かした教育活動の概要と成果 (■：取組、◇概要、○：成果)

(1) 学習指導

■メンタリングシステムによる中高合同授業

◇高校生をメンター、中学生をメンティーとして、中高で学び合う合同授業をすべての教科において実施

○分かりやすく伝える方法を生徒が主体的・対話的に考え、実践することで深い学びが実現

(2) 生徒指導

■ピア・サポート・プログラムによる関係づくり

◇互いの良好な関係づくりのためのピア・サポート・プログラムを中高合同で実施

○中学生と高校生、また高校生同士の良好な関係づくりを実現

(3) 進路指導

■インターンシップ報告会への中学生の参加

◇高校2年生によるインターンシップ報告会に高校1年生及び中学校2年生も参加

○職業観の育成と、主体的・積極的な取組姿勢の推進

(4) 特別活動

■部活動の中高合同実施

◇野球部、卓球部、吹奏楽部における計画的・継続的な合同練習

○高校生としての自覚や、他を思い遣る心の醸成が実現

2-1 中高一貫教育の特色を生かした具体的な取組①「進路指導」

インターンシップを活かしたキャリア教育

奥尻高等学校では、キャリア教育の一環として、インターンシップを望ましい勤労観・職業観の醸成と異世代とのコミュニケーション能力の向上に活かしている。高校2年生でのインターンシップは、中学校2年生で実施している「職業体験」の継続・発展と位置づけている。

(1) 取組の概要

ア 奥尻町内の各事業所に生徒1～2名を振り分け、2日間の「総合的な学習の時間」として実施

イ 実施後の報告会において、持ち原稿なしのプレゼンテーション及び質疑応答を実施

ウ 報告会への高校1年生及び中学校2年生の参加（中学校2年生にとっては中学校における職業体験の事前指導を兼ねる）



【漁業（岩牡蠣の収穫）の様子】

(2) 取組の成果等

ア 事業所との事前打合せや、実施後の礼状の作成等を通して、将来の社会人としての自覚を持つことができた。

イ 卒業後の進路選択だけでなく、将来を見通した自己のキャリアについての意識が高まり、学校生活全般に主体的に取り組む生徒が増えた。

ウ 報告会のプレゼンテーションを通して、自分の考えを論理的に分かりやすく伝える力が身に付いた。

エ 生徒のアンケートからは、「人を笑顔にし、誰かのために自分の力を使うことがあらためて大事だと思いました。(高校1年生)」など、働くということを軸として、生徒のキャリア意識が高まった様子を確認できた。

2-2 中高一貫教育の特色を生かした具体的な取組②「学習指導・生徒指導」

「メンタリングセッション」による主体的な学びの推進

本校では、6年間を見通した中高一貫教育シラバスに基づき、単に中高合同の行事や教員の乗り入れ授業にとどまらず、中高合同でメンター（高校生）とメンティー（中学生）による対話である「メンタリングセッション」を様々な場面で取り入れている。特に、高校生による学習サポートは、高校生自身が中学生に分かりやすく伝えるために、学習内容の確実な理解を図っている。

(1) 取組の概要

- ア 各教科の授業において、高校生がメンターとして中学生に対して学習のサポート等を実施
 - 合同のアクティビティ、高校生による中学生への学習指導及び高校の学習成果のプレゼンテーション
- イ 中高合同による部活動（野球部・卓球部・吹奏楽部等）
 - 高校生がメンターとして練習を進め、中学生へのアドバイスなどを計画的、継続的に実施
- ウ ピア・サポート・プログラムにおいて、年間6回のプログラムのうち1回分を、中高間の良好な関係作りとして、高校生がメンターとして実施



【合同の数学の授業の様子】

(2) 取組の成果等

- ア 「メンタリングセッション」に向けた準備を通して、学習内容について主体的により深く学ぶ姿が見られ、日常の授業において学ぶ意義を再認識し、積極的に学びに向かう生徒が増えた。
- イ 中高合同の部活動では、中学生への指示や技術指導を通して、高校生としての自覚を持ち、技術的な研究をするなど主体的に取り組む意識が高まった。
- ウ ピア・サポート・プログラムを通して、多様性を理解し、互いを尊重する心が醸成され、良好な人間関係の構築、いじめの未然防止につながるとともに自己肯定感が高まった。



【ピア・サポート・プログラムの様子】

2-3 中高一貫教育の特色を生かした具体的な取組③「生徒指導」

高校生による中学生及び保護者への学校説明会の実施

本校では、連携型中学校である奥尻中学校をはじめ、本校への入学を希望する中学生及びその保護者対象の学校説明会において、生徒によるプレゼンテーションで学校の魅力を発信している。

(1) 取組の概要

- ア 奥尻中学校3年生及び保護者対象の説明会において、高校生が学校説明のプレゼンテーションを実施
- イ 全国からの入学希望者及び保護者対象の説明会において、高校生が学校説明のプレゼンテーション、学校施設案内及び寄宿舍案内を実施

(2) 取組の成果等

- ア 中学生及び保護者へのプレゼンテーションを通して、本校の魅力を再認識し、学校生活を主体的に取り組む生徒が増えた。
- イ 生徒のプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力が向上した。
- ウ 学校や地域への愛着や誇りを持つ生徒が増えた。



【学校説明会の様子】

1 中高一貫教育の特色を生かした教育活動の概要と成果 (■：取組、◇：概要、○：成果)

(1) 学習指導

■地域の課題解決学習及び環境教育における連携

- ◇地域の特性を踏まえ、地域課題の解決を目指す探究活動や、地域を取り巻く自然風土を生かした環境教育を中高一貫で系統的に実施（全学年）
- 探究的な見方・考え方が身に付き、生徒の地域への愛着や環境に対する興味・関心が向上

(2) 生徒指導

■各種行事及び部活動における連携

- ◇健康講演会の合同実施、ボランティア活動や部活動の合同実施（全学年）
- 異年齢の交流活動を通して、社会性や豊かな人間性を育成

(3) 進路指導

■キャリア教育の視点に立った体験的な学習における連携

- ◇地域の基幹産業を理解する「地域産業体験」の合同実施（中学校1年生と高校2年生）
- 体験的な学習を合同で行うことにより、コミュニケーション能力が向上

(4) 特別活動

■中高合同の宿泊研修における連携

- ◇自然体験活動やスポーツ交流等を行う宿泊研修の合同実施（中学校2年生と高校1年生）
- 学校外での活動を通して、集団の一員としての自主性や協調性が向上

2-1 中高一貫教育の特色を生かした具体的な取組①「学習指導」

小学生の学習サポート「ジャンプアップひろば」の実践

上川高等学校では、小学生の学習サポートを通して、生徒の学習意欲を向上させることを目的として、長期休業中に地域の公共施設を利用した学習支援を行っている。

中高一貫教育で行われている異年齢の交流活動の成果を生かし、小学生の学習習慣の向上を支援している。

(1) 取組の概要

- ア 夏季・冬季休業中の各6日間の期間で、町営のホールを会場として取組を実施している。
- イ 町教委の協力を得ながら、上川小学校の児童に対して参加を呼び掛け、毎回、約90名程度の児童が参加している。
- ウ 本校及び上川中学校の有志の生徒が教師役となり、算数や国語の学習内容を小学生に分かりやすく丁寧に説明し、小学生の学習活動を支援している。



(2) 取組の成果等

- ア 中高一貫教育で行われている異年齢の交流活動を踏まえ、他者を思いやる気持ちをもちながら、学習内容を分かりやすく伝える工夫をすることにより、小学生の学習内容に対する理解が深まった。
- イ 他者に説明することで、生徒が授業に対する自らの姿勢を再考する機会となり、積極的に授業に臨む生徒の姿勢が見られるようになった。
- ウ 取組を充実させるために、教師役で参加する生徒に対する事前研修の工夫・改善を図ることとしている。



【ジャンプアップひろばの様子】

2-2 中高一貫教育の特色を生かした具体的な取組②「進路指導」

地域の基幹産業を理解する「地域産業体験」の実践

本校では、平成14年の連携型中高一貫教育の導入時から、中学校と合同で「地域産業体験」を行っている。

中学生と高校生と一緒に仕事を体験して、地域の基幹産業であるホテル業に対する理解を深めるなど、中高一貫のキャリア教育を推進している。

(1) 取組の概要

ア 中学校1年生と高校2年生の異年齢の交流及びホテル従業員との交流を通じて、人間関係・社会形成能力を育成している。

イ 上川町の基幹産業の概要を理解し、自らの勤労観・職業観を深め、キャリアプランニング能力を育成している。

ウ 学習の振り返りにおいて、中学校1年生に対しては、どのような職業があるのか、高校2年生に対しては、将来社会人となるには、どのような心構えをもてばよいのかを考察する機会としている。



(2) 取組の成果等

ア 地域産業の現状を学び、課題を考えることにより、探究的な見方・考え方を育成することができた。

イ 様々な体験から、自らの勤労観・職業観を深め、取組後の学習活動に意欲をもって、取り組むようになった。

ウ ホテル従業員との関わりや体験で学んだ挨拶や礼儀などを、日頃の学校生活に生かすことができた。



【地域産業体験の様子】

2-3 中高一貫教育の特色を生かした具体的な取組③「生徒指導」

除雪・災害ボランティアの実践

本校では、様々なボランティア活動を通して地域に貢献し、体験を通して新たな学びや気づきを発見し、生徒同士で共有する中で、自分自身の行動を振り返る機会としている。

年齢の異なる人々、価値観の異なる人々との関わりから、相手の思いを受け入れるといったコミュニケーション能力や自己肯定感、自己有用感を獲得する機会としている。

(1) 取組の概要

ア 上川町内の除雪を通して、積極的に地域に貢献できることを実感させている。

イ 災害ボランティアセンターの立ち上げ訓練に参加することにより、万が一災害が起こった時に、支援者の中心となって活動できるようにしている。

ウ 活動を通して、中学生との交流及び地域住民との交流を深めている。



(2) 取組の成果等

ア 除雪ボランティアを通して、地域の一員としての役割を理解し、地域貢献を果たすことができた。

イ 災害ボランティアセンターの立ち上げ訓練については、未知の環境において自らの役割を自覚し、異年齢集団の中で協力し合い、積極的に行動し、防災に対応する力を身に付けることができた。

ウ ボランティア活動に取り組むことにより、自分自身に対する理解が深まると同時に、関わり合う他者やそれらを取り巻く社会全体に対する興味・関心を高めることができた。



【除雪ボランティアの様子】

1 中高一貫教育の特色を生かした教育活動の概要と成果 (■：取組、◇概要、○：成果)

(1) 学習指導

■基礎基本の定着を重視した学習指導の徹底

- ◇各教科における中高6年間のシラバスの作成及び授業交流、乗り入れ授業の実施
- 中高教員合同の分析による生徒の得意・不得意分野の明確化

(2) 生徒指導

■地域と連携したあいさつ運動等の実施

- ◇あいさつ運動及び生徒会リーダー研修会等の中高合同実施
- 基本的な生活習慣の定着、好ましい人間関係の構築、中高教員の生徒理解の深化

(3) 進路指導

■6年間にわたるキャリア教育プログラムの実践と改善

- ◇複数回のインターンシップ、課外講習、資格取得、面接指導、合同講演会の実施
- 生徒の自己理解及び進路意識の深化

(4) 特別活動

■小中高間における異世代の交流及び行事の合同実施

- ◇講演会及び部活動、国際募金活動、ボランティア活動等の合同実施
- 他者を思いやる心の醸成、コミュニケーション能力の向上

2-1 中高一貫教育の特色を生かした具体的な取組①「学習指導」

教科の連携を密にした確かな学力の育成

～中高6年間を見通した学力向上の取組～

湧別高等学校では、中高の連携に加え、小学校との連携も含めた取組を充実させることにより、各教科の基礎基本の定着を図るとともに、学習意欲の向上と、確かな学力の育成に取り組んでいる。

(1) 取組の概要

- ア 中高6年間にわたる教科シラバスの作成
- イ 中高教員による乗り入れ授業及び授業交流、教科書や教材等の効果的な活用のための研修の実施
- ウ 習熟度別授業、進路実現に向けた少人数指導
- エ 高校生が小学生の夏・冬休みの宿題等の指導をする「まなびいタイム」(町教委主催)の実施



【まなびいタイムの様子①】



【まなびいタイムの様子②】

(2) 取組の成果等

- ア 中高6年間のシラバスの作成に向けた取組、授業交流後に行われる中高教員の研修における成果の分析により、生徒の得意・不得意分野についての共通認識を持つことができた。
- イ 「まなびいタイム」の取組において、高校生が講師となり、指導的な立場を体験することにより、学習意欲の向上及び進路意識の深化が図られた。

2-2 中高一貫教育の特色を生かした具体的な取組②「進路指導」

6年間を通じたキャリア教育プログラム ～総合的な学習(探究)の時間の実践(ねらいと活動内容)～

本校では、平成17年の連携型中高一貫教育導入以来、総合的な学習の時間を活用したキャリア教育プログラム「STC (School To Career)」を作成し、実践している。このキャリア教育プログラムは、単なる進路指導に終始することなく、中高6年間を見通した上で、生徒一人一人の在り方生き方を深く探求させることを目的としている。

(1) 取組の概要

学 年	主なねらい	主な活動内容
中学1年	<ul style="list-style-type: none"> ・地域にある身近な職業を知り、職業についての興味関心を持つ。 ・コミュニケーション能力の基礎となる、要点をまとめる力を身に付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・講演会「職業を身近に感じよう」 ・地域巡検「身近な物とその周りの仕事」、「地域の特産について調べてみよう」
中学2年	<ul style="list-style-type: none"> ・在り方生き方について考えるとともに職業についての理解を深める。 ・プレゼンテーションを通じて、コミュニケーション能力の基礎となる、原稿をまとめる力を身に付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・講演会「高校生のライフスピーチ」 ・講演会「職業と私」 ・公開面接～高校生との面接
中学3年	<ul style="list-style-type: none"> ・就業体験を通じて勤労観・職業観について考える。 ・2、3年次に培ったコミュニケーション能力を活用して、プレゼンテーションを完成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・職場体験実習（地元企業1日間） ・プレゼンテーション～将来の夢について
高校1年	<ul style="list-style-type: none"> ・自分に向き合い、自己を知る。 ・興味のある様々な職業を調べ、就職にいたる過程を知る。 ・社会人としてのマナーを理解し、職業について説明できるようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・職業研究～職について調べ学習 ・進路別ガイダンス「進学（大学・専門学校）、就職（企業・公務員）」 ・ライフプラン作成（グループワーク）
高校2年	<ul style="list-style-type: none"> ・就業体験を通じて勤労観・職業観について考える。 ・進路希望を確定し、自分と将来について語れるようになる。 ・専門知識を学び職業の理解を深める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・インターンシップ（地元企業2日間） ・インターンシップ成果発表会 ・進路講演会（3年生の体験談）
高校3年	<ul style="list-style-type: none"> ・夢を叶えるための実践力を身に付ける。 ・高校卒業後の人生設計について考え、発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「高校生のライフスピーチ」実践 ・ライフスピーチ（自分の職業と将来について）

(2) 取組の成果等

ア 勤労観・職業観の育成のみならず、基礎的・汎用的能力や、論理的思考力、創造力など、社会的・職業的自立に必要な力や意欲・態度等について系統的・計画的に育成している。

イ 高校生が講師を務める中学校での講演や面接練習において、「身近な先輩の声」が中学生の心に響いており、講師を務めた生徒にとっては、自分を見つめ直したり自己を表現したりする機会となり、望ましい人間関係を構築する力の育成につながっている。

ウ 中学校2年生の職場体験実習及び高校2年生のインターンシップにおいて、事前の企業打合せから実施後の成果発表までを一連のプログラムとして実践することにより、社会形成能力やキャリアプランニング能力の育成が図られている。



【高校1年生 職業研究の様子】

1 中高一貫教育の特色を生かした教育活動の概要と成果 (■：取組、◇概要、○：成果)

(1) 学習指導

■中高乗り入れ授業の実施

- ◇各中学校で、週2時間高校教員が英語のティーム・ティーチングを実施
- 学力における基礎・基本の向上や中高のスムーズな学びの接続が実現

(2) 生徒指導

■部活動における高校生による中学生への指導

- ◇中高の部活動の練習を合同で実施
- 高校生が中学生を指導することにより、中学生に模範を示そうとする意識が高まり、高校生としての自覚やマナーの遵守等の意識が向上

(3) 進路指導

■連携中学校生徒への授業公開及び学校説明会の実施

- ◇高校の授業参観、体験授業の実施。高校入学後の高校生活や学習状況、進路実績等が具体的に分かる学校説明会の実施
- コース制授業の見学や、学校生活の様子等に関する説明を通して、中学生の進路意識と学習意欲が向上

(4) 特別活動

■「鹿追町小中高・教育大学釧路校 吹奏楽合同演奏会」の実施

- ◇平成19年度より鹿追町と北海道教育大学の間で相互協力協定を結び、小中高大が連携した豊かな音楽文化を継承することを目的として、教育大生による小中在校生への音楽教室と、合同コンサートを開催。高校生は、大学生の指導を受けるとともに、大学生をサポートして中学生以下の子どもたちを指導
- 異年代と音楽を通じて交流することにより、高校生としての自覚が深まり、社会性が向上

2-1 中高一貫教育の特色を生かした具体的な取組①「生徒指導、進路指導」

異年代間の交流を活かした生徒指導・進路指導の推進

鹿追高等学校では、異年齢の生徒が交流することにより、発達段階の違いによる価値観や考え方の違いを理解し、自己の生き方について考え、夢の実現をめざす豊かな人間性を身につけることを目指して、中高交流授業を推進している。

(1) 取組の概要

- ア 中高生が主体的に、「ネット・スマホの利便性と危険性」「いじめ」「異なった文化を持つ者の間のコミュニケーション」等設定したテーマに基づきグループワークを行い、意見交換によって考えを深め、発表することにより、問題点と解決の方向性を共有した。
- イ キャリア学習の一貫として、「高校受検について」「高校の学習について」「高校生活について」「高校卒業後の進路について」というテーマでグループ討議（1班6～7名）を実施。中学生が質問をし、それに対して高校生が自らの体験から説明をした。



【中高交流授業の様子】

(2) 取組の成果等

- ア 生徒の協調性や思いやりの心が育成されるとともに、自分の言葉で意見を発表することを通して、主体性が高まり、表現力が身に付いた。
- イ 中学生は、これからの高校生活に対して理解を深め、自らの進路について考えを深めるきっかけとなった。高校生はコミュニケーション能力を高めるとともに、自らの高校生活を振り返り、自らの生活を改善していくきっかけとすることができた。また、地域の中高生の交流を、さらに深めることができた。

2-2 中高一貫教育の特色を生かした具体的な取組②「学習指導」

幼小中高 13 年間を見通した 1-4-4-4 カリキュラムの推進

本校では、幼小中高 13 年間を見通し、グローバル社会に対応した、21 世紀を生き抜く汎用的な資質や能力を持つ人材の育成を目指し、地域の認定こども園・小・中学校と連携して様々な取組を充実させるなど、確かな学力の育成を図っている。特に、高校 1 年生全員が参加するカナダ・アルバータ州ストニープレイン町への 2 週間短期留学を核とした国際理解教育については、こども園から高校 1 生までの英語教育の成果を実際の海外での生活で試すことにより、高校での英語及び異文化理解に対する学習意欲をさらに高める効果を上げている。この取組は、すべての生徒について、ホームステイを受け入れてくれるホストファミリーがいなければ実現しないが、ストニープレイン町と鹿追町との 30 年以上にわたる友好関係がこのことを可能にしている。



【英語科中高交流授業の様子】

(1) 取組の概要

ア グローバル社会を生き抜く力を身に付けるため、英語に重点を置いたコミュニケーション能力の向上を目指した、中高交流授業を実施。英語科大学教授による講演会や連携入試への対応等、中高生の英語による交流を中心とした多彩な内容を準備し、道及び町 A L T の援助も活用しながら中高の英語科教員が連携して指導。

イ 21 世紀を生き抜く汎用的な資質や能力を育成するため、英語科以外の教科でも中高交流授業を実施。高校生が先生役となり、中学生をリードしながら、グループワークを中心に各教科での問題について協働しながら学習を行った。

ウ 中高交流授業での連携を軸に、中高の教科担任及び教育局の高等学校教育指導班・義務教育指導班とも連携しながら、教科指導における研究協議を実施。「主体性・多様性・協働性」、「思考力・判断力・表現力」などを育むことを目標に、異校種間での教員の連携を推進。

エ 国際理解教育推進の一貫として、町内中学校 2 年生全員も参加して、カナダ短期留学成果報告会を実施。高校生が 2 週間の短期留学の成果について、中学生や保護者及び地域の関係者へプレゼンテーションを行い、町全体で留学の成果を共有する。



【音楽科中高交流授業の様子】



【中高研究協議の様子】

(2) 取組の成果等

ア 中高交流授業の実施により、高校生が「リトルティーチャー」として活躍できるようになり、リーダーシップやコミュニケーション能力を高めることができた。また、中学生は、高校生活について具体的なイメージを持つことができ、自らの進路実現について考えを深めることができた。

イ 異校種の教員が生徒に身に付けさせたい資質や能力について、グループ協議等を行うことにより、発達の段階ごとに整理し、今後の取組に向けた課題等を共有することができた。

ウ 町全体で推進する国際理解教育の核となるカナダ短期留学の成果について、中高生はもちろんのこと、地域全体で共有することができ、高校の教育活動への理解が地域全体で深まった。



【カナダ短期留学成果発表会の様子】

1 中高一貫教育の特色を生かした教育活動の概要と成果 (■：取組、◇概要、○：成果)

(1) 学習指導

■中高6年間を見通した段階的な学力向上のための取組

- ◇「長期休業中高校生派遣プログラム」～夏季休業中に高校生が中学生の自習をサポート
- ◇「学力実態の検証」～CRT、中高一貫基礎学力テスト、スタディーサポートの分析
- ◇「オープンクラスウィーク」～保護者や地域住民、中高の教員同士による授業参観週間
- 中高教員による学力実態の共同分析や、相互に授業を参観することで子どもたちの現状を把握でき、効果的に6年間の学習指導を行うことができた。

(2) 生徒指導

■生徒会交流会の実施

- ◇中高の生徒会が集まり、各学校の共通した課題を発見し、解決方法を考案する取組
- 課題解決能力を養い、学校の代表生徒としての資質を向上させることができた。

(3) 進路指導

■中高進路講話・中高語り場の実施

- ◇高校3年生の進路決定者が、中学生に対し、高校での進路学習についての講話を実施
- ◇高校1・2年生が中学校3年生に対して、高校進学に向けた学習や進路決定について、小グループによる座談会を行う。
- 中学生の高校入学後の進路に向けた意識が高揚した。

(4) 特別活動

■中高広域合同清掃活動

- ◇中高の全校生徒で複数の小グループを編成し、町内のゴミを拾う取組
- 中高の生徒の人間関係を深化させ、また地域への美化意識や奉仕精神を養うことができた。

2-1 中高一貫教育の特色を生かした具体的な取組①「進路指導」

高校生による中学生への進路講話・語り場の実践

広尾高等学校では、生徒の進路意識の高揚を目的に「進路カルテ」を活用し、中学入学後からの進路希望を把握するなど、6年間を見通した系統的な進路指導の充実を図っている。また、高校生が自分の体験を中学生に説明する「中高進路講話」及び「中高語り場」は、中学生の高校入学後の進路に対する意識を高める取組となっている。

(1) 取組の概要

ア 高校生による進路実現に向けた学習体験講話の実施

進路が決定した高校3年生が中学生に対し、学校生活の過ごし方や学習方法など進路実現に向けた活動について、民間企業就職、公務員就職、看護・専門学校進学、大学進学など、進路別に発表する機会を設定

イ 中学校と高校生が学校生活について語り合う場を設定

高校1・2年生が中学校3年生に対して、高校進学に向けた学習や学校生活等についての中学生からの質問や意見交流の場を設定



【中高進路講話の様子】

(2) 取組の成果等

- ア 高校での進路実現に向けた活動を中学生が理解することにより、目的をもって高校に入学する生徒や入学当初から自分の進路について考えることのできる生徒が増加した。
- イ 講話や語り場を行う高校生のプレゼンテーション能力が向上した。
- ウ 高校生が自らの体験を語ることを通して、学校生活を振り返る機会となり、自分自身の課題に向き合うことができるようになった。

2-2 中高一貫教育の特色を生かした具体的な取組②「学習指導」

様々な指導形態を活用した SCC（中高連携授業）の推進

本校では、多様な能力や適性を持つ広尾の子どもたち一人一人に応じた、きめ細かな学習指導を通して基礎・基本の確実な定着を図っていくため、中学校と高校の教員が連携し、SCC (Secondary Collaborated Class) を実践している。指導形態として、中学校・高校の教員によるチーム・ティーチングや、中学校における高校教員主導型、高校における中学校教員主導型、そして高校生が中学生の学習をサポートするチューター制度型などがある。また、オープncラスウィーク（地域住民、保護者に向けた共同授業公開週間）中においても積極的に SCC を実施することを推奨し、外部への周知も行っている。

(1) 取組の概要

◇通常授業における中学校、高校教員の相互乗り入れ授業の実施

- ア 理科及び家庭の授業で、調理実習や問題演習等のサポートとして、教員が相互に参加
- イ 中学校の国語及び社会の授業で、高校教員が作文の書き方や北方領土問題を取り上げた郷土学習を指導
- ウ 中学校の英語の授業で、高校教員が英語コミュニケーション能力の向上を目的としたインタビュー演習を実施



【高校教員による中学生への北方領土の授業】

◇チューター制度型学習の実施

- ア 中学校の数学の授業で、高校1年生が中学1年生に問題演習のサポート
- イ 中学校の国語の授業で、高校2年生が中学1年生に古典への興味・関心を持たせるためにテーマ別の導入授業を実施
- ウ 体育で、高校の選択授業のマット運動・鉄棒において、高校生による中学生の実技の補助、実技の模範の演示



【高校生による中学生の実技の補助】

◇中高共通授業テーマの設定

- ア 主体的・対話的で深い学びを推進し、思考力・判断力・表現力・コミュニケーション能力を育む授業
- イ 個に応じた、わかる・できる授業
- ウ 一時間一時間明確なねらいや評価規準が見通されている計画的な授業

◇長期休業中に高校生が中学生の自習をサポート

長期期間中の学習意欲の向上や、教える教わるの関係から生まれる学習効果



【高校生による中学生の自習のサポート】

(2) 取組の成果等

- ア 日常とは異なる授業形態のため、生徒の学習に対する興味・関心が向上した。
- イ 高校教員が中学生を、中学校教員が高校生を指導する中で、生徒一人一人の習熟度や授業態度を理解し、日常の学習指導に活かすことができた。
- ウ チューター学習では、学力や学習意欲の向上のほか、異年齢の生徒同士の交流が図られ、生徒のコミュニケーション能力が向上した。
- エ 中高共通授業テーマを設定することで、6年間でどのようにして子どもたちの学力向上を図っていくかが共有でき、中高の教員同士が同じ方向性を持って教育活動を実践することができた。

(3) 今後の方向性

各教科で SCC を継続させ、回数や内容の充実を図るとともに、中学校と高校の教員が6年間の見通しを持って教育活動を計画的に行っていく。また、様々な活動を通じて中高生の交流がイベント的に行われるのではなく、当たり前のよう交流しあえるように工夫していく。

1 中高一貫教育の特色を生かした教育活動の概要と成果 (■：取組、◇概要、○：成果)

(1) 学習指導

■全教員が実施する公開授業研究による授業改善

- ◇中学校教員を招いた、本校の全教員による公開授業研究及び研究協議を年5回実施。中学校の公開授業研修への本校教員の参加
- 生徒の学力・学習状況の把握及び学校種間の接続を意識した系統性のある授業改善

(2) 生徒指導

■中高生徒会役員の交流

- ◇生徒会役員対象の研修会において、地域の将来像や課題についてのグループワークの実施
- リーダーとしての資質向上及び課題解決能力の育成

(3) 進路指導

■ふるさと教育を通じたキャリア教育の推進

- ◇高校3年生の進路報告会に中学生が出席
- 自己の進路や在り方・生き方を考えるきっかけづくり

(4) 特別活動

■中高部活動交流

- ◇定期的な部活動交流の実施
- 異校種の生徒同士の交流による、社会性や豊かな人間性の育成

2-1 中高一貫教育の特色を生かした具体的な取組①「学習指導・特別活動」

地域との協働による学習の充実と地域活性化

羅臼高等学校では、羅臼町の自然、歴史、文化、産業を学び、ふるさと羅臼の課題を見出し、課題解決のための具体的方策を導く学習の充実を図ることで、町内での雇用拡大について理解を深め、将来、羅臼町を担う人材の育成を図っている。

(1) 取組の概要

- ア ふるさと教育(知床学)を取り入れた主体的・対話的で深い学びの実現に向け、羅臼町内の幼稚園、小学校、中学校、高校の各校種ごとの公開授業や、羅臼町指導法研究会の実施を通し、授業改善を図る各種研修会を実施している。
- イ 公開授業研修を年5回、本校の全教員が実施し、授業力の向上を図っている。羅臼町内の幼稚園、小学校、中学校の先生にも参加いただいている。
- ウ 町内の各種祭典や、羅臼町総合文化祭、定期演奏会などで、中高の吹奏楽部が合同で演奏している。



【他校種の先生方と研究協議の様子】

(2) 取組の成果等

- ア ふるさと教育(知床学)を発達段階に応じて体系的にまとめることにより、効果的に授業改善を行うことができた。また、羅臼町指導法研究会等を通し、教職員がその理念を共有することにより、質の高い教育を提供することができた。
- イ 他校種の先生方との交流により、他校種の観点を踏まえた授業改善を図ることができ、授業力の向上につなげることができた。
- ウ 羅臼町の祭典を盛り上げる一翼を担っただけでなく、芸術・文化活動に貢献することができた。また、高校生から中学生に対する技術指導などを通じ交流を深めることができた。



【祭典での合同演奏の様子】

2-2 中高一貫教育の特色を生かした具体的な取組②「進路指導」

ふるさと教育（知床学）を通じたキャリア教育の推進

本校では、ふるさと教育（知床学）の活動を通し、生徒一人一人のふるさとに対する意識を高め、ふるさとを誇りに思い、ふるさとから広い視野で世界や自身の在り方・生き方について考察する機会を設定することで、体系的なキャリア教育を推進している。この取組は、羅臼町内の幼稚園、小学校、中学校、高校と、羅臼町及び羅臼町内の企業等が連携し、児童生徒のそれぞれの発達段階に応じ、地域の自然や産業の仕組みについて探究する体系的な取組を基盤として実施している。

(1) 取組の概要

- ア 中学校及び本校における職場見学やインターンシップを通し、地域の産業の仕組みを理解するとともに、地域の課題解決に取り組むことにより、ふるさと羅臼を理解する。
- イ 羅臼町や羅臼町商工会議所等の関係機関からの支援を受けながら、地域の良さや地域での生活を営むことの意義等について理解を深め、小中高が連携して体系的なキャリア教育の充実を図る。
- ウ 羅臼町内の幼稚園、小学校、中学校、高校の代表が一堂に会し、各校が取り組むふるさと教育（知床学）について発表する、ユネスコスクール研究発表会を実施している。
- エ 中学校2年生を本校に招き、本校3年生による進路報告会を実施している。発表に際しては、進路決定までのプロセスやこれからの生き方について順序だった説明となるよう、外部講師による特別授業を通し、プレゼンテーションについての事前学習を行っている。



【インターンシップの様子】



【ふるさと教育（知床学）における生態系学習（ワシ学習）の様子】

(2) 取組の成果等

- ア 生徒の発達段階に応じ、学びの系統性を意識した学習内容とすることにより、地域の産業の仕組みについて興味・関心を高め、生徒自らが意欲的に取り組むことにより、ふるさと羅臼について理解を深めることができた。
- イ 知床の地域性を生かした、小中高連携の多角的・多面的な探究活動を通し、ふるさと教育に対する理解を深め、主体的な態度を育むことにより体系的なキャリア教育の充実を図ることができた。
- ウ ユネスコスクール研究発表会等を通し、プレゼンテーション能力や、コミュニケーション力の向上につなげることができた。また、生徒の自己肯定感が高まり、進路活動等に自信を持って取り組むことができるようになった。
- エ 中学生の段階から将来の進路について主体的に考えることができ、望ましい勤労観・職業観を育成することができた。



【ユネスコスクール研究発表会の様子】

中学校と高校が連携した取組「特別活動」

中高交流の取組

月形高等学校では、今年度から月形中学校との交流の取組を実施している。地域の少子化により高校への入学者が減少していることを踏まえ、教職員が中高連携の視点を持ち、生徒と一緒にあって、地域の高校の特色を中学生に理解してもらうことが重要であると考え、交流学習を企画した。

1 取組の概要

(1) 内容

- ア 月形中学校1年生10名、本校1年生19名を対象とし、年3回実施する。
- イ 中学校に家庭科の専科教員が配置されていないため、家庭科の授業を中核とした交流学習とする。
- ウ 月形町教育委員会や地元農家と連携して、食材や生花などの支援を要請する。

(2) 実際の様子

- ア **1回目：令和元年10月24日（木）「オリエンテーション」**
10名の中学生が来校し、高校生が学校施設を紹介した後、中高生混合の6つのグループに分かれて、グループポスターを作成した。作成したポスターは、高校と中学校それぞれに掲示した。
- イ **2回目：令和元年12月10日（火）「月形町の食材を使った調理実習」**
1回目の交流で仲良くなったグループで調理実習を行った。月形町の食材（米、牛肉、トマトジュースなど）を使って、中学生と高校生が協力してハッシュドビーフを作った。
- ウ **3回目：令和2年2月20日（木）「ハーバリウムづくり」**
「花の町 月形町」の特色を生かし、地元農家から寄贈していただいた生花をドライフラワーにして、ハーバリウムを制作した。



【オリエンテーションの様子】

2 取組の成果等

- ア 2回目終了後の高校生用アンケートには、「1回目は緊張していたが、2回目で仲良くなった」「中学生が美味しいと喜んでくれてとてもうれしかった」等の感想が記載されていた。
- イ 中学生用アンケートからは、「先輩が優しく分かりやすく教えてくれたので、いい交流ができたと思います」「先輩がとても明るくて優しく、気軽に話しかけられるので、月形高校に入りたい気持ちになった」等の感想が記載されていた。
- ウ 地域の教育資源（人・物）と連携した取組を実施することにより、地域に向けて本校の特徴を発信できる機会が増えた。
- エ 日常の授業での少人数の取組とは違い、異年齢交流ができたことは、お互いの生徒にとって貴重な機会となった。
- オ これまで、中学校と高校が連携して、芸術鑑賞や検定受検、部活動の合同実施などに取り組んできたが、生徒が主体となって、中学生と高校生が積極的にコミュニケーションをとる取組を推進することで、生徒の満足度が高まることが分かった。
- カ 2回目終了後のアンケートで、「人数が少ないため普段できないスポーツをしたい」という意見が多かった（全体の29名中20名）ので、今後検討したい。
- キ 来年度は、中学校や町教育委員会の意見を踏まえて交流できる教科・科目や特別指導等を拡充するなど、さらなる内容の充実を図りたい。



【調理実習の様子】

中学校と高校が連携した取組「特別活動」

ピア・サポート局による中学校との交流会

札幌英藍高等学校では、8年前よりピア・サポートの取組を行っており、ピア・サポート局としての活動も7年目に入った。ピア・サポート局は学校内で本校の生徒が抱える悩みや不安と一緒に考えて、支援してよりよい生活を送れるようにできることを目標に活動している。

局員は必修のピア・サポートトレーニングを受けることでピア・サポーターとなり、悩み事の相談等の活動をスムーズに行うことができるようになる。トレーニングはさらに、コミュニケーションスキルを高めたり、人見知りを改善したりするのにも適している。日頃の局活動は個人のペースでの相談活動がメインだが、取組の成果を生かし、学校見学会での相談ブースの設置や近隣中学校との交流会にも取り組んでいる。

(1) 取組の概要

令和元年(2019年)11月8日(金)に上篠路中学校と、11月11日(月)にあいの里東中学校と、12月13日(金)に篠路中学校と、交流会を各中学校にて実施した。

上篠路中学校とは4年目、他2校とは5年目となる本交流会には上篠路中学校から18名、あいの里東中学校から20名、篠路中学校からは65名が参加し、高校からは3回で延べ36名の局員が参加、いずれも過去最多の規模となった。

各交流会ではいずれも、あいこじゃんけん、バースディリング、足し算トーク、聖徳太子ゲーム等の取組を通して、中学生と高校生が1時間ほどの交流を行った。

(2) 取組の成果等

ア 会場全体が笑顔でいっぱいになり、大いに盛り上がった本交流会における活発な交流を通して、同じ地域を支える中学生と高校生のコミュニケーションを深めることができた。

中学校の生徒会長からは、「中学生と高校生が交流する場を持てたことは、貴重な経験になりました。」という御礼の言葉もあった。

イ 本交流会は本校ピア・サポート局員が日頃の取組の成果を校外で発表する貴重な場となっており、校内でのよりスムーズな相談活動に寄与するとともに、日々の活動の意義を自ら再確認する機会にもなっている。

ウ 本交流会終了後、座談会形式で、高校生活や英藍高校について質問を受ける場面も設けられた。中学から高校への進学をスムーズに進める役割も担うことができていると考えている。



【上篠路中学校との交流会】



【あいの里東中学校との交流会】



【篠路中学校との交流会】

中学校と高校が連携した取組「学習指導」

校種間連携を通じた英語力向上の取組

蘭越高等学校では、平成30年度に蘭越町で発足した、全学校・園で構成する外国語教育連携推進会議に参加し、外国語教育の推進、異校種との連携、円滑な接続を目指し、様々な取組を行っている。

(1) 取組の概要

ア 幼保小中高一貫 CAN-DO リストの作成

今年度、蘭越町の英語教育の充実に向けて、発達段階ごとに、目指す児童生徒の姿と学習到達目標を示した「CAN-DO リスト」を作成した。本校は高等学校段階を担当し、「社会的な事象について、客観的事実や情報、自分の考えや意見を理由とともに8～10文程度の英語で伝えることができる」など、各学年で4技能5領域ごとに学習到達目標を設定した。



【乗り入れ指導・全体指導の様子】

イ 中学校への乗り入れ指導

高校における授業の雰囲気を経験し、中学生が高校進学後にスムーズに学習できるようにすることをねらいとして、本校の英語科教員が、中学校の英語の授業で教科指導を行う乗り入れ指導を実施した。

【対象クラス 蘭越中学校 3年英語 基礎コース】

授業	実施期日	高校の英語科教員の役割
第1回	10月9日6校時	A L Tとして自己紹介など英語でやりとり
第2回	10月18日6校時	ティーム・ティーチングのT2として指導をサポート
第3回	10月31日6校時	ティーム・ティーチングのT2として指導をサポート
第4回	11月5日5校時	授業者として英語でのグループ討論の指導

第1回の授業では、アイスブレイクを兼ねて、自己紹介などの言語活動を行い、英語による応答を行った。第2回及び第3回の授業では、「ロボットの導入」に関する自分の意見を英文で表現する言語活動が行われ、高校の英語科教員は机間指導により、生徒のロボットに対する意見を引き出したり、英語の表現の仕方や英単語の意味などを助言したりした。第4回の授業では、高校の英語科教員が主担当となり、第3回の授業で生徒が作成した各自の意見をもとに、グループ討論を指導した。

(2) 取組の成果等

ア 本校に入学する生徒の多くが町内中学校からの進学であることから、中学校段階までのCAN-DOリストとの接続を考慮し、高校段階のCAN-DOリストを改善することができた。

イ 乗り入れ指導の実施により、高校の英語科教員は、中学校段階における生徒がつまづきやすい箇所や生徒の理解を深める指導方法を知ることができ、自らの教科指導力の向上や授業改善につなげることができた。

ウ 中学校と高校の英語科教員2名が授業を行うことにより、手厚い指導が可能となり、生徒の学習内容の理解を深めさせることができた。



【グループ討論の様子】

(3) 取組の方向性

校種間連携の充実により、生徒の英語力向上が期待できることから、今後、乗り入れ指導をどの単元で行うか検討し、継続して実施することや、小・中学校の乗り入れ指導に高校の英語科教員が参加すること、児童生徒による英語での交流活動を検討することなどに取り組み、地域の児童生徒の英語力向上を図るとともに、本校における授業改善を推進する。

幼小中高が連携した取組「学習指導、特別活動」

学校種間の連携を密にする組織的活動

知内高等学校では、幼小中高の教員が連携して教育の理論と実践の研究による教育の質の向上を目指す知内町教育研究所の活動に参加している。また平成20年度に英語教育の発展充実を目的に英語推進協議会が設立され、平成30年度からは本校が事務局校として町内の英語教育を推進している。その他、協議会や研究所の枠を超えた連携も数多く行っている。

(1) 取組の概要

ア 知内町教育研究所（幼小中高）

年4回のサークル活動において、各教科の教員同士による学校種間での公開授業や町内研修会を実施している。

イ 学びの充実検討会議（幼小中高）

知内町教育研究所の下部組織として各学校の研究代表者と管理職が小・中学校の全国学力・学習状況調査の町内の傾向分析を通して課題を把握し、改善点の方策を探る会議を実施している。その中で昨年度、町内小中高で統一した学習規律の策定を行った。

ウ 英語推進協議会（小中高）

隔月で会議を開催し、町内の英語教育の発展のために指導法の交流や講演会の企画、研修会への派遣交流などを実施している。

・ 中高合同授業

中学生と高校生が高校の授業体験をテーマに合同で授業を行った。中学生と高校生がペアとなり英語で会話したりシャドーイングしたりするなどの活動を行った。

・ 出前授業

高校の英語教員が小学校で年5回程度英語の授業を行っている。

・ 英語指導講演会

北海道教育大学札幌校から講師を招き、町内・町外の教員が参加する英語教育に関する講演会を開催した。

エ その他

・ イングリッシュキャンプ（小中高）

中学校を会場に夏冬実施した。2日間に渡って外国人留学生と、英語を使ったアクティビティに取り組んだ。知内町内の小中高の児童生徒が参加した。

・ 部活動の合同練習（中高）

中学校と高校のサッカー部、バスケットボール部、陸上部は合同練習を適宜行っている。また、吹奏楽部は各種演奏会で合奏や事前練習を行っている。

・ 知内幼稚園への出前授業・運動会手伝い（幼高）

高校の英語教員が幼稚園で月2回程度英語の授業を実施している。教科「健康スポーツ」履修者による創作ダンスの指導や運動会の道具係としてボランティア部が支援している。



【中高合同授業】



【幼稚園での出前授業】

(2) 取組の成果等

ア 学びの充実検討会議を通して、町全体の児童・生徒が抱える学習面での課題が共有され、改善の方向性の意思統一が図られた。

イ 中高合同授業、部活動の合同練習を通して、生徒同士の交流が図られ、教員同士の連携ができるようになってきている。

ウ 高校生が幼小中の児童・生徒と異年齢交流を行うことで、相手の立場や気持ちを考え、場に応じた態度やコミュニケーションを学ぶことができてきている。

エ 英語の指導に関して経験のある高校の英語教員が授業の進め方や様々な手法について小学校の教員に伝えることで、授業の不安を軽減することができた。

小・中学校と高校が連携した取組「学習指導」

小中高 12 年間を見通した学力向上の取組

天塩高等学校では、天塩町内の小中学校で組織されている天塩町教育研究協議会に参加し、児童生徒の確かな学力の向上を目指し、小中高の学習内容の系統性や指導方法の継続性について研修を推進し、授業の工夫・改善に取り組んでいる。

(1) 取組の概要

- ア 天塩町教育研究協議会総会（4月）
- イ 教科部会研修会（年4回）
 - 3回は同日開催、1回は教科ごとに開催
- ウ 教育研究発表会（2月）
- エ 研究紀要「天塩の教育」の発行（1月）



【本校教員による中学校での社会乗り入れ授業の様子】

(2) 取組の成果等

- ア 公開授業等による研究協議を通して、小中高の指導方法について情報交換することができ、児童生徒の発達の段階に応じた指導方法についての理解が深まり、授業改善に役立てることができた。
- イ 乗り入れ授業やチーム・ティーチング等の教員の専門性を生かした日常とは異なる授業形態により、学習の楽しさを実感でき、児童生徒の学習に対する興味・関心が向上した。
 - 保健体育部会では、各運動領域・種目について「12年間のつながりキュラム」（下表参考）を作成し、小中高においてはこれに準じた授業を実施しており、研究授業を行いながら見直しを図り、指導の工夫・改善を図っている。
- ウ 中学生及び高校生を対象に、「平常時の授業」と「乗り入れ授業」に対する意識調査では、興味関心や主体的な取組について肯定的な回答をした生徒が「乗り入れ授業」の方が多かった。

【中学生の回答】

毎回の授業の目標やねらいを理解して授業に取り組んでいる	
平常時の授業	64.8%
乗り入れ授業	71.2%

【高校生の回答】

毎回の授業の目標やねらいを理解して授業に取り組んでいる	
平常時の授業	64.0%
乗り入れ授業	71.9%

- エ 中学校の教員と共に授業することで、生徒に対してきめ細かな授業を展開することができ、生徒の興味関心を高めることにつながっている。また、中学校の授業を観察することにより、「目標やねらいのもたせ方」について教員が意識して授業改善に取り組むようになってきている。また、小中高での学習状況を踏まえた興味関心のもたせ方について工夫することで、生徒の学習意欲が高まり、家庭学習に取り組むようになってきている。

天塩町小・中・高連携 保健体育「12年間をつなぐカリキュラム」【球技編】ネット型

球技（ボールを扱う運動）	
低学年	ボールゲーム・雑遊び つく 転がす 投げる 当てる 捕る 蹴る 止める 逃げる 追いかける 障地を取り合う ○運動の基本となるそれぞれの動きを、一つに絞ったり、他と組み合わせながら基本の動作を身につける。
	ネット型（ゲーム） ボール・用具操作 ・いろいろな高さのボールを片手または両手ではじく、打ち付けるなどして相手コートに返球する ボールを持たない動き ・ボールの方向に体を向けたり、ボールの落下点やボールを操作しやすい位置に体を移動したりする ☆ボールの動きに対応できる（落下点）児童が8割以上
中学年	ネット型（ボール運動） ボール・用具操作 ・自陣からサービスを打ち入れる ・見方が受けやすいようボールをつなぐ ・相手コートにボールを打ち返す ボールを持たない動き ・ボールの方向に体を向けて、その方向に素早く移動する ☆全てのチームで5回以上のラリーができる
	バレーボール・卓球・テニス・バドミントン ☆ラリーを続けることを重視！ ○ボールや用具の操作 ○定位置に戻る →空いた場所をめぐる ボール・用具操作 ・いろいろな高さのボールを片手または両手ではじく、打ち付けるなどして相手コートに返球する ボールを持たない動き ・相手の打球に備えた準備姿勢 ・プレイ開始時の定位置への戻り ・プレイ後のボールや相手への正対 ☆ボールや用具、バットなどの操作に関して、どの基本技能でもより良く行うことのできる生徒が8割以上
1・2年生	☆空いた場所をめぐる攻防を重視！ ○役割に応じたボール・用具操作 ○仲間と連携して拾う、つなぐ、打つ ○仲間と連携して空いた場所に攻撃する、空いた場所を作り出す ○攻撃に対応して守る ボール・用具操作 ・ねらった場所へのサービス ・空いた場所やねらった場所への返球 ・攻撃につながる高さや位置へのつなぎ・ネット際の防御や攻撃 ・強い振りでの高い位置からの打ち込み ・ポジションの役割に応じて拾う、つなぐ、打ち返す ボールを持たない動き ・空いている場所のカバー ・連携プレイのためのフォーメーションの動き ☆高3までの学習内容で、基本技能を身につけている生徒が6割以上 （高3までの学習内容で、種目の特性やルールを理解している生徒が8割以上）
	ボール・用具操作 ・変化をつけて、ねらった場所へのサービス ・緩急や高低をつけての打ち返し ・回転をかけた球の打ち返しと返球 ・変化のあるサーブに対応したレシーブ ・移動を伴うボールの攻撃につながる高さや位置へのつなぎ ・仲間と連携し、 ボールを持たない動き ・守備のバランスを維持する動き ・仲間とタイミングを合わせた守備位置の移動 ・連携した攻撃の際の相手をはきつける動き ☆中2までの学習内容における特性・ルールを理解し、基本技能を身につけている生徒が8割以上 （中3・高校入学年次での学習内容を習得するには、中2までの学習内容を確実に身につけることが必要となるため）
3年生	
高校入学年次	
高校入学年次以降	

中学校と高校が連携した取組「学習指導」

「中高交流会」の取組

枝幸高等学校では、毎年11月の1週目に枝幸中学校との間で互いの授業を参観するなどの「中高交流会」を実施している。「中高交流会」には、枝幸中学校の他にも、同じ枝幸町内の歌登中学校や枝幸南中学校の教員も参加し、中学校と高校が連携した授業改善の在り方などについて協議している。

(1) 取組の概要

ア 平成30年度の取組

- 期 日 平成30年11月2日(金)
- 参加者 枝幸高校教員、枝幸町内の各中学校教員
- ねらい 授業参観等を通して、今後の自校の授業の工夫や改善に生かす。
- 内 容 授業参観と教科ごとの交流分科会を実施した。



【交流分科会(英語)の様子】

イ 令和元年度の取組

- 期 日 令和元年11月1日(金)
- 参加者 枝幸高校教員、枝幸町内の各小・中学校の教員、枝幸町教育委員会及び枝幸町役場の職員
- ねらい 枝幸高校及び枝幸町内におけるICT教育の充実について理解を深める。
- 内 容 授業参観と公立千歳科学技術大学の今井順一教授による「ICT・eラーニングの効果的な活用」をテーマとした講演会を実施した。



【今井教授の講演会の様子】

(2) 取組の成果

ア 平成30年度の取組

- 「単元の目標をより明確にし、生徒に評価の観点を理解させる」「学習した内容が、生徒の実生活や実社会にどのようにつながっているのかを示す」など、中学校及び高校における授業改善の進め方を共有することができた。
- キャリア教育の視点から、生徒の日常的な取組の積み重ねを、地域の中学校及び高校で引き継ぐことの重要性を確認することができた。

イ 令和元年度の取組

- 令和2年度から、枝幸町では「高校と地域が連携した『ふるさと教育』推進プロジェクト」による学習環境整備事業により、枝幸高校の全生徒にタブレット端末が貸与することとしており、ICTの活用の在り方について理解を深めることができた。

(3) 今後の取組の方向性

中学校教員及び高校教員相互による出前授業の実施など、地域の子どもは地域で育てるという「学びの連続性」を意識し、地域の子どもたち全体の資質・能力を高める取組の一層の充実を図る。

中学校と高校が連携した取組「学習指導、進路指導、生徒指導」

異校種間連携の推進と佐呂間町の支援を得た多彩な教育活動の実践

佐呂間高等学校では、全校生徒が佐呂間中学校出身であるという特色があり、佐呂間町教育委員会（以下、町教委）の協力のもと、町内小中高校での異校種間連携を推進している。また、スクールバス運行をはじめ、検定受験料の助成やアメリカ・アラスカ州姉妹校交流推進事業など、佐呂間町の支援を得ることで、より一層の教育活動の充実を図り、魅力ある学校づくりを進めている。

(1) 取組の概要

ア 教育実践研究発表会における教員間連携

中学校での公開授業及び研究協議に本校教諭も参加し、「生徒が主体的に取り組み、確かな学力を身に付ける学習指導の在り方」について協議した。

イ 総合的な学習の時間への協力

佐呂間中学校1年生の職業調べ学習において、高校教諭の仕事について調べるグループに対して、本校教諭がインタビュー形式での質問に回答・説明するなどの協力を行った。

ウ 音届けコンサートの実施

本コンサートは、町教委主催でプロの演奏家を招き、豊かな情操を養うことを目的に開催している。中高の吹奏楽部が共演し、事前練習を含め両校生徒が交流を図った。

エ 姉妹校交流推進事業と語学指導助手（ALT）の派遣

佐呂間町とアメリカ・アラスカ州パーマ市は、今年で姉妹都市提携40周年の歴史を誇り、両校中高生が相互留学により、異文化理解の促進を図っている。

また、佐呂間町では平成6年から、姉妹都市より語学指導助手を採用しており、小中高校の英語教育の推進を図っている。

オ 「進路説明会」「学校見学説明会」の開催

佐呂間中学校3年生とその保護者を対象に、7月に「進路説明会」を実施した。また、10月には、本校を会場に「学校見学説明会」を開催し、校長をはじめ教務部長や執行部による学校概要説明、模擬授業や部活動見学等を実施した。

カ 高校進学についてのアンケート実施

12月、佐呂間中学校全校生徒とその保護者及び教員を対象とした、アンケート調査を実施した。高校選びや入学後に関心のある項目、佐呂間高校への意見、要望等について集約した。

キ 佐呂間町「小中高生徒指導委員会」「特別支援教育連携協議会」の設置

佐呂間町の児童生徒に携わる小中高及び町教委の担当者が共通認識を持ち、適切な指導・相談・支援体制の構築を図るため、定期的に開催している。



【教育実践研究協議の様子】



【パーマ高校での授業の様子】

(2) 取組の成果等

ア 教育実践研究発表会における教員間連携では、中学校の教育活動について理解を深めることができた。また、「主体的・対話的で深い学び」の充実に向け、教員の資質・能力の向上を図ることができた。

イ 佐呂間町の支援を得て、中学生と高校生が合同で留学等の体験的な学習活動を行うことにより、生徒のコミュニケーション能力が育成された。また、国際化が進む社会に必要な価値観を育むとともに、異文化についての興味・関心を高め、意欲的に学習に取り組むことができた。

ウ 「進路説明会」「学校見学説明会」の2度にわたる開催により、中学生とその保護者が佐呂間高校の教育活動について理解を深めることができた。実施後のアンケート結果から、説明会に参加した生徒の88%が、佐呂間高校に対して「関心が高まった」と回答している。

エ 高校進学についてのアンケート実施により、地元の中学生とその保護者及び中学校教員が持っている本校に対しての期待や要望を把握することができた。この結果を参考に、本校が育成を目指す資質・能力の検討を図り、新学習指導要領の実施に向けた教育課程編成に取り組む。

中学校と高校が連携した取組「学習指導・特別活動」

地域に根ざした高校づくり

雄武高等学校では、平成30年度より地域連携特例校となるに当たり、地元高校存続と地域教育に根ざす高校づくりの推進を図る目的として、「雄武高校 Shine（輝き）プロジェクト（通称OSP）」を立ち上げた。地域や町、小・中学校との連携を密に取り魅力ある高校を目指すため、「教育課程の見直し」「地域行事への積極的な参加」「地域の人による講演」「地域の歴史学習」「遠隔授業の導入」などについて、有識者から意見をいただき、高校の教育活動の魅力化を推進している。

また、町内の中学校は雄武中学校一校のみであり、校舎も高校と近いため、以前から部活動や教員研修等で連携を図っている。さらに、雄武町から経済的な助成など多くの支援をいただいております、町、小・中・高の結び付きを強めながら、地域に根ざした高校づくりの取組を充実させている。

(1) 取組の概要

ア 中高交流会及び放課後学習会

中学校教員と高校教員でお互いの授業力向上のために毎年交互に公開授業を実施し、教科別に分かれて授業の振り返りを行っている。管理職を含めた全ての教員が参加できるように、時間割等の工夫を行っている。また、雄武中学校放課後学習会で本校の教員が、中学生に学習をアドバイスしている。



【放課後学習会の様子】

イ 部活動との連携

陸上部、卓球部において年に数回の合同練習を行っており、吹奏楽部は町内の産業観光祭りで合同演奏を行っている。



【陸上部合同練習の様子】

ウ 中高合同芸術鑑賞会

雄武町教育委員会主催により、毎年中学校と高校が合同で芸術鑑賞会を実施している。令和元年度は、ゴスペル歌手のKiKiさんと選抜された中学生・高校生が舞台上でパフォーマンスを披露した。



【芸術鑑賞会の様子】

エ 雄武町学校教育振興推進協議会（雄教振）

本協議会は、学習部会、生徒指導部会、養護教諭部会の各部会で構成され、町内の小・中・高の担当者が集まり連絡調整や情報交換を行い、雄武町の教育を一体的に推進している。

オ 雄武高校 Shine（輝き）プロジェクト（通称OSP）

雄武町役場職員、雄武町教育委員会、観光協会、商工会、雄武小学校長、雄武中学校長、本校PTA会長らで構成され、年3回魅力ある高校づくりについて協議を行っている。

(2) 取組の成果等

ア 中高交流会の公開授業では、隔年で中学校、高校の授業を参観し、それぞれの良いところや課題等を出し合い研鑽に努めている。中学校の放課後学習会は、主に高校の数学教員が出向いて定期考査前や夏季休業中に学習のアドバイスをしているが、行事や会議等で出向くことができないことが課題であり、調整が必要である。

イ 部活動を合同で練習したり披露することにより、中学生の中には、高校生と一緒に練習する経験を通じて先輩のパフォーマンスにあこがれを持ったり、顧問の指導や雰囲気の良いを感じたりして本校に進学する生徒もいる。中学校にある野球部やバレーボール部が本校にはないため、部活動において、生徒の希望に全て応えることができないことが課題である。

ウ 雄武町教育委員会の協力で開催する芸術鑑賞会により、普段は文化や芸術に身近に触れること少ない中学生、高校生の視野を広げるとともに、情操を育むことができている。

エ 各学校が連携することにより、学校教育が分断されることなく、生徒の情報共有や意見交換が可能となり、小学校から高校までの円滑な教育活動の充実が図られている。

オ 今後、本校の教育活動を一層充実・発展させるため、コミュニティ・スクールの導入を視野に入れ検討することとしている。

中学校と高校が連携した取組「学習指導」

公開授業・中高交流会による生徒の実態把握と授業改善

興部高等学校では、例年5月と11月に授業公開週間を設定し、近隣の小中学校・高校の教員や教育委員会、地域の方々に授業を公開している。また、中学校の公開授業にも多くの教員が参観することで地域の生徒の状況を把握するとともに、教科担任同士の交流を通して、授業改善の機会としている。

さらに、年に1回、興部中学校・西興部中学校との交流会を実施し、高校入学後の生徒の学習面や進路動向についての説明及び中学校から高校に対する要望等を集約して地域の生徒の学力向上に努めている。

(1) 取組の概要

ア 公開授業

- ・全ての教員が「主体的・対話的で深い学び」をテーマとした授業を期間中に1回以上実施（他の授業も全て公開）した。
- ・授業参観後、授業参観シート（学習者の立場での記述）に記入し、教務部が集約後、授業者に提出した。
- ・中学校教員等が記入した授業参観シートをもとに、研究協議を実施し、授業改善の方策について検討した。



【公開授業の様子】

イ 中高交流会

- ・高校入学後の生徒の実態等（基礎力診断テスト、部活動の取組状況、資格取得の状況、進路決定状況等）について、情報交換を行った。
- ・中高連携に関する取組（教員研修・部活動連携）について、意見交換を行った。
- ・高校から中学校、中学校から高校に対する要望について集約した。

(2) 取組の成果等

ア 公開授業

- ・高校においては、教科担任が一人の教科もあるが、専門教科が同じ中学校教員との交流を通じて、お互いの専門性を高めることができた。
- ・中学校のICTを活用した授業や、グループ学習の実践を高校の授業改善につなげることができた。
- ・教員以外の方の授業参観シートの記述を参考にしたり、学習者（生徒）の視点に立った振り返りを行ったりすることにより、授業改善を図ることができた。
- ・中学校、高校における学習内容をお互いに理解することで、学習の連続性を意識した授業改善を図ることができた。

イ 中高交流会

- ・高校入学後の生徒の状況を中学校と共有することにより、生徒理解の深化や今後の課題を把握することができた。
- ・それぞれの学校からの要望事項を理解することにより、学校課題を明確化することができた。
- ・小規模校における部活動の活性化に向け、中高継続した部活動の設置に向けた協議を進めることができた。
- ・地域の生徒を育て、成長させるための方策について共通理解を図ることができた。

(3) 取組の方向性

- ・「地域の生徒を地域で育てる」という目標の実現に向け、教員間の連携を一層強化し、中高連携を充実させていく。
- ・中学校への出前授業については、授業時数等の関係で継続した取組とはなっていないが、中学生の興味・関心を高め、学習意欲を喚起することができることから、中学校からの要望を踏まえて毎年実施していきたい。

中学校と高校が連携した取組「特別活動」

津波防災教育における校種間連携

浜中町は、太平洋沿岸に位置し過去に多くの津波被害をうけている。これまで、1960年のチリ沖地震による津波で甚大な被害を受けたほか、2011年の東日本大震災でも2メートルを超える津波が浜中町に押し寄せた。沿岸部に立地する霧多布高校及び霧多布中学校にとって、生徒が津波について考え、津波が襲来した際の対応について訓練を実施することは、極めて重要である。

両校が立地している地区は、周囲に高台のない平坦な地形であるため、津波発生時には自動車を利用し高台へ移動することが町の防災計画に記されている。このため、両校では、平成26年度より、津波発生時の自動車及びスクールバスによる避難行動について合同で訓練を行っている。

(1) 取組の概要

- ア 中学校・高校の防災担当者間で、前年度の避難訓練の反省事項を踏まえた実際の避難行動について協議を行い、今年度の避難訓練についての綿密な立案を行う。
- イ 年度初めに、中学校・高等学校それぞれで、自動車及びスクールバスへの乗車訓練を実施し、それぞれの学校での取組の成果・課題を踏まえ、避難訓練の計画を修正、調整する。
- ウ 合同避難訓練では、中学校・高校が同時に避難を開始し、それぞれの車両に乗車後、避難場所（中山間活性化施設）へ移動し、浜中町防災対策室長より講評を受ける。



【乗車の様子（高校）】



【講評の様子（避難先）】

(2) 取組の成果等

- ア 両校の生徒にとって津波に対する防災意識を高める機会になるとともに、両校の教職員にとっても危機管理対応を連携して行うことへの共通認識を高める契機となった。
- イ 中・高の6年間継続して実施することで、避難行動の向上が見られ、昨年度から50秒程度避難にかかる時間が短縮された。

(3) 取組の方向性

- ア 道路の渋滞や遮断などの状況も想定されることから、町の防災計画どおりに避難できない場合の避難行動について、両校の教員で協議し、訓練にも反映させていきたい。
- イ 町として訪問団を受け入れた「津波サミット」の成果を生かし、町内の児童生徒が一堂に会して地域の防災について主体的に考える場を設定し、高校生をリーダーとした協議の成果を、地域の関係機関や地域住民と連携して具体的な取組につなげるような取組についても検討していきたい。